

プレゼンテーション技術の向上を図る教員研修

—教員研修プログラムおよび教材の開発と実践—

林 徳治

谷口 由美子*

Program of Teacher training for improving presentation skill

HAYASHI Tokuji

TANIGUCHI Yumiko*

教師のプレゼンテーション技術の改善は、教授・学習過程における学習者と教師間のコミュニケーションを活性化する上で、極めて重要である。筆者らは、教師の説明や発問等、対面授業および遠隔授業の双方におけるプレゼンテーション能力の向上に主眼をおいた教師訓練プログラムを開発した。本稿では、その一環として開発したテキスト教材を活用して山口県の小中高養護教諭 77 名を対象に実施した授業の概要について報告した。

1. はじめに

授業において成立する教授・学習過程を教育的コミュニケーションととらえた場合(図1参照)、普段の授業では、教授者側の説明・指示・質問など、学習者への「働きかけ」に多くの時間を充てている。従って、教授者の「働きかけ」の教育技術は、学習者への知識獲得はもとより、学習意欲の高揚等情意面において重要な役割をもつ。そして効果的な「働きかけ」は、学習者からの「お返し(返答)」を引き出し、さらに教授者からの「働き返し(KR情報)」へとつながるため、コミュニケーションの活性化を図る上でも極めて重要である。

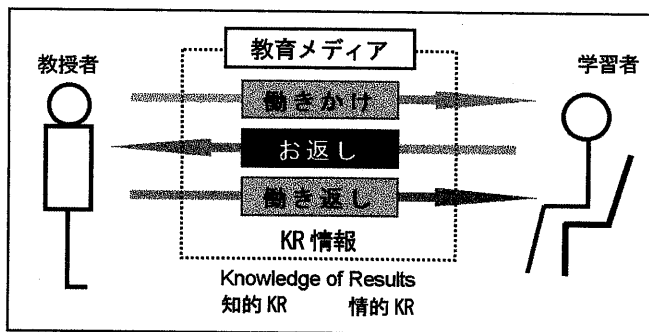


図1 3方向の教育的コミュニケーションモデル

2. 研究の経緯・目的

筆者(林)は、事前研究として、大学等で学ぶ外国人留学生の情報活用能力の育成に主眼をおき、外国語を母語とする学生とのコミュニケーション(授業)の改善を目的とした自学自習用教材を開発した。¹⁾開発した自学自習用テキストやマルチメディアCD教材は、学習情報研究センター(平成10年度優良賞受賞)を通して、国内の関係者に配布し貢献できた。

* 三田学園高等学校

ここでは、教材の有用性に加え、日本人教員による講義中のプレゼンテーション技術の善し悪しが、外国人留学生への知識・理解や意欲・関心等、情意面に大きく寄与していることが判明した。さらに筆者らは、平成 11 年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「遠隔講義におけるプレゼンテーション技術の向上を図る教師訓練プログラムの開発・評価」(研究代表者－林徳治)²⁾の一環として、対面・遠隔授業各々における教授者のプレゼンテーション技術に関して、[1]言語、[2]非言語、[3]教育メディア利用の 3 つの観点から、分析調査を実施した。

結果として、理論の伝達を主にした講義内容・方法よりも、受講者参加型の課題別の演習を重視した方法の有用性が実証された。

筆者らは、これらの事前研究を基盤に、本教師訓練プログラムのコンテンツとして、プレゼンテーション技術の習得・向上を目的とした、自学自習用の演習テキスト教材を開発した。また、徳島大学工学部生および教員養成学部生を対象とした授業、小中高大学の現職教員を対象とした情報教育研修、国際協力事業団(JICA)専門家派遣前研修等において、教師のプレゼンテーション能力の育成に焦点をあてた教師訓練プログラムの開発・実践を行ってきた。本稿では、開発されたテキスト教材、および実施した授業・研修のうち、山口県免許法認定講習での事例について報告した。

3. 研修用テキスト教材の開発

(1) 教材名

『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術－相互理解のための自己表現術－』
全 126 頁 (B5 判)³⁾

(2) 内容と特徴

本教材の構成(目次)を表 1 に示す。本教材の内容は、理論および事例(1 章・7 章)と、授業や研修において自学自習ができるプラクティス(2~6 章)とで構成されている。プレゼンテーション技術の向上を図る上で、①バーバル(verbal:言語)、②ノンバーバル(nonverbal:非言語)、③メディア利用技術(OHP や電子プレゼンテーションツール等)の 3 つの観点から解説している。対面・遠隔授業の双方での教授・学習過程における教育的コミュニケーションの改善をめざした理論と演習が行なえ、広く社会人の教養コアとしてのプレゼンテーション技術の習得と向上をねらいとした。本書のプラクティスの章には、以下のような特徴がある。

- ①各章は独立しており、どの章からも学習できる。
- ②Plan(計画)－Do(実施)－See(評価)のサイクルで学習できる。
- ③各プラクティスの 1 項目は、90 分間を目安として学習できる。
- ④プラクティスに必要な教材・教具を明記している。
- ⑤プラクティスに用いる資料やシートを添付している。また、HP(<http://www.ica-j.org>)に公開されており、参照・引用可。

本教材は平成 12 年 7 月に刊行されて以来、大学・大学院授業、教員研修、国際協力事業団(JICA)の専門家派遣前研修等で利用されている。さらに、本教材の一部は、教師教育用マルチメディア CD 教材として開発(代表:永野和男)が進められている。

表1 本テキスト教材の構成(目次)

(『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術』, ぎょうせいより抜粋)

| | |
|--------------------------------|---|
| 第1章 コミュニケーションとプレゼンテーション | 5-4 プレゼンテーションソフトの利用(1) |
| 1-1 コミュニケーションとは | 5-5 プレゼンテーションソフトの利用(2) |
| 1-2 プレゼンテーションとは | 5-6 教材提示装置の利用 |
| 第2章 言語と絵によるコミュニケーション | 第6章 プレゼンテーションの実施および評価 |
| 2-1 言語(話しことば) | 6-1 マイクロプレゼンテーション |
| 2-2 言語(文字)と絵 | 6-2 プレゼンテーション(1) |
| 第3章 非言語によるコミュニケーション | 6-3 プレゼンテーション(2) |
| 3-1 表情・態度 | 第7章 高度情報通信社会に求められる コミュニケーション能力 |
| 3-2 ジェスチャー | |
| 第4章 相互理解のための訓練 | 7-1 コミュニケーションの改善をめざした 授業の取り組み |
| 4-1 写真による観察・洞察 | 7-2 インターネットとコミュニケーション |
| 4-2 感受性訓練(トラストウォーク) | 7-3 ホームページの品性評価 |
| 4-3 ドラマによる訓練 | 7-4 遠隔講義システムとコミュニケーション |
| 第5章 プレゼンテーションに利用するメディア | 7-5 仮想現実とコミュニケーション |
| 5-1 黒板, カード・チャートの利用 | 7-6 コミュニケーションとメディア |
| 5-2 OHP の利用(1) | |
| 5-3 OHP の利用(2) | |

4. 開発されたテキスト教材による授業実践

筆者らは、山口県免許法認定講習において、開発された教材を利用した講義・演習を実施した。実践の内容・方法を以下に述べる。

- (1) 日時：2000年8月22日～24日(90分間×3コマ×3日間)
- (2) 場所：山口大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 対象：山口県の小中高養護教諭77名(内訳を表2に示す)
- (4) 授業科目名：教育メディア論(1種免許法認定講習)
- (5) 授業内容：講義および演習(概要を表3に示す)
- (6) 授業形態：一斉対面講義, 一斉遠隔講義, 班別対面演習(表3参照)
- (7) 教材・教具：テキスト教材[1]⁴⁾(『情報教育のすすめ』, ぎょうせい)
 テキスト教材[2](『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術』,
 ぎょうせい), 黒板, 電子黒板, コンピュータ(演示用), ビデオ, OHP

表2 受講者の内訳(学校種・男女別)

| | 県立 | | | | 市立 | | | | 町立 | | | | 計 |
|---|----|---|---|---|----|---|---|---|----|---|---|---|----|
| | 小 | 中 | 高 | 養 | 小 | 中 | 高 | 養 | 小 | 中 | 高 | 養 | |
| 男 | 0 | 0 | 0 | 1 | 13 | 4 | 0 | 0 | 13 | 0 | 0 | 0 | 31 |
| 女 | 0 | 0 | 1 | 1 | 32 | 1 | 0 | 0 | 8 | 3 | 0 | 0 | 46 |
| 計 | 3 | | | | 50 | | | | 24 | | | | 77 |

表3 「教育メディア論」授業概要

| 日 | 校時 | 授業内容(概略) | 担当(TA) | 授業形態(場所) | 教材・教具 |
|-------|----|---|--------|------------------|---|
| 8月22日 | 1 | 講義[1] ・情報, 教育メディア ・情報活用能力 | 林 | 一斉・対面・講義 (1室) | テキスト教材[1・2], 黒板, 電子黒板, OHP1台, VTR, 演示用コンピュータ |
| | 2 | 講義[2] ・教育的コミュニケーション ・プレゼンテーション ・これからの教師に求められる資質 | 林 | 一斉・対面・講義 (1室) | テキスト教材[1・2], 黒板, 電子黒板, OHP1台, VTR, 演示用コンピュータ |
| | 3 | プレゼンテーション技術演習[1] ・絵とジェスチャー | 林(3) | 班別・対面・演習 (2室) | テキスト教材[2], 黒板, 電子黒板 |
| 8月23日 | 1 | プレゼンテーション技術演習[2] ・言語(話しことば) | 林(3) | 班別・対面・演習 (2室) | テキスト教材[2], 図形カード |
| | 2 | 講義[3] ・総合的な学習の時間の授業設計 | 林(1) | 一斉・対面・講義 (1室) | テキスト教材[1] 印刷資料, OHP1台 |
| | 3 | プレゼンテーション技術演習[3]前半 ・TP教材作成 | 林(3) | 班別・対面・演習 (2室) | テキスト教材[2], OHP4台 |
| 8月24日 | 1 | プレゼンテーション技術演習[4] ・OHPによるマイクロプレゼンテーション | 林(3) | 班別・対面・演習 (2室) | テキスト教材[2], OHP4台 |
| | 2 | テレビ電話会議システムを利用した遠隔授業 ・話題提供①: NTT山口支局 ・話題提供②: 京都府宇治市教育委員会 | 林鷹岡 | 一斉・遠隔・講義 (1室) | 電子黒板, テレビ会議システム, (NTTフェニックス) |
| | 3 | 衛星通信(SCS)を利用した遠隔授業 ・岐阜大学 ・東京学芸大学 | 林鷹岡 | 一斉・遠隔・講義 (特室) | スペースコホレーションシステム(SCS) |

※1室: センター2F本教室, 2室: センター2F本教室およびセンター1Fコンピュータ室, 特室: 本学庁舎1棟1F

(8) 講義およびプレゼンテーション技術演習の詳細

①講義[1]・[2]

本講義は、筆者(林)が担当した一斉対面講義である。理論の伝授を主とした講義形態、すなわち、教授者の話しことばによる一方向のプレゼンテーションのみに偏ることなく、各種メディアを活用して聴覚と視覚に訴えるメディア利用によるプレゼンテーションを多く取り入れた。移動黒板に加え、電子黒板(リコー社製・メディアサイト)による情報の表現・伝達、電子プレゼンテーションツール(Power Point)によるDTPS(Desk top Presentation)、ビデオ教材から抜粋による事例紹介等を組み合わせた講義形態を試みた。利用したビデオ教材を以下に示す。

1) プレゼンテーションとは

プレゼンテーション能力の育成を目的に、筆者らが開発した。プレゼンテーションの改善を図る訓練方法であるマイクロプレゼンテーションについても、フリップ等を活用して解説している。

2) 現職教員による教員研修のための模擬授業

模擬授業は、教師訓練プログラムの一つとして筆者らが開発した。現職教員によるマイクロティーチングに、演劇性を取り入れており、教師のプレゼンテーション能力の向上に有用性のある実践として紹介されたニュース番組の録画。

3) 小学校におけるテレビ電話会議システムを利用した授業実践事例

- 京都府瑞穂町立三ノ宮小学校と京都府長岡市立長岡第六小学校による交流学习の記録。
- タイ王国プーケット県アヌバン小学校と京都府宇治市立南小倉小学校による交流学习の記録。
- 山口県光市立光小学校児童と市長との意見交流(インタビュー)活動の記録。

4) 福井大学附属中学校中学校における授業実践

総合的な学習の時間におけるプレゼンテーション活動(準備から発表まで)の記録。

5) SCS による遠隔授業事例

京都教育大学附属教育実践研究指導センターと本学教育学部による遠隔授業が紹介されたニュース番組の録画。

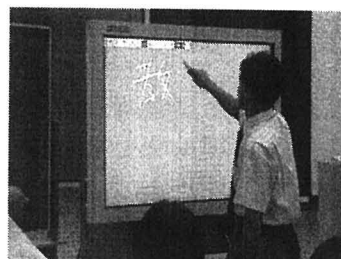


図2 電子黒板

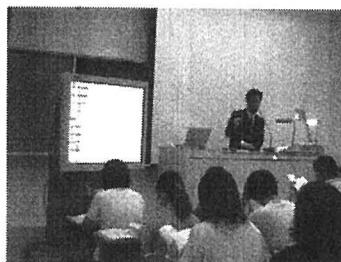


図3 授業風景(講義[1])

②講義[3]

本講義は、筆者(林)とTA1名が担当した一斉対面講義である。現職小学校教員が「総合的な学習の時間における授業設計」をテーマに自らの授業実践事例を報告し、受講者とのディスカッションを実施した。実践報告は、児童生徒・教師双方の情報活用能力の育成を主眼とした、問題解決的な学習の先行的事例、および「スモール・ワールド・プロジェクト」⁵⁾

の一環として作成した学校紹介 HP の取り組み等に関するものであった。同じ現職教員として共に学び成長しようとする立場からの報告で、総合的な学習の時間は、各教科の学習と融合しつつ情報教育に内包されるという視点を提案した。教材・教具として、テキスト教材[1]、OHP、印刷資料を利用した。受講者である現職教員が本講義を通して、他の受講者や担当者との共同的な活動をもつ、すなわち、教員間のコラボレーションを図ることをねらいとした。

③テレビ電話会議システムを利用した遠隔授業

本授業は、テレビ電話会議システム(NTT・フェニックス)を利用した3局接続(NTT 山口支局、京都府宇治市教育委員会、本センター)による一斉遠隔講義である。現在、山口県下の各学校において、テレビ電話会議システムに代表される遠隔システムのインフラ整備が進められている。そのような状況において、受講者が遠隔授業の実体験を通して、遠隔教育システムの活用イメージを形成することをねらいとした。

■話題提供[1]: 本大学

「IT(情報技術)の教育利用」

■話題提供[2]: NTT 山口支局(図4)

「山口県のIT技術と教育ー山口県の現状と今後ー」

■話題提供[3]: 京都府宇治市教育委員会(図5)

「京都府宇治市におけるTV会議システムの教育活用」



図4 NTT 山口支局



図5 京都府宇治市教育委員会

④衛星通信(SCS)を利用した遠隔授業(図6)

本授業は、本学メディア棟において衛星通信システム(SCS: Space Collaboration System)を利用した3局接続(東京学芸大学、岐阜大学、本大学)による一斉遠隔講義である。



図6 岐阜大・東京学芸大

⑤プレゼンテーション技術演習[1]ー絵とジェスチャーによる情報表現・伝達ー

班別(8人一組:7, 7人一組:3)に自学自習形態で演習を実施した。

1) 目的

- ・伝えたい情報を絵(文字を除く)によって効果的に表現・伝達する能力を訓練する。
- ・絵やジェスチャーから得られる情報をもとに、的確に判断・推察する能力を訓練する。

2) 演習総括: 筆者(林), TA; 筆者(谷口), 他2名

3) 教材・教具: テキスト教材[2], ミニ黒板(A4判)とチョーク(白・赤・黄)各班1セット

4) 活動内容: 演習活動の方法・手順を表4に、演習風景を図7~9に示す。

表4 絵とジェスチャーによる情報表現・伝達活動の内容

| 項目 | 時間 | 内容 |
|--------------|-----|---|
| Step1 - Plan | 15分 | 各自テキスト教材[2]により演習課題の内容・手順把握 |
| Step2 - Do | 30分 | <p>●演習1：絵による情報表現・伝達</p> <p>初めて訪れた外国で、自分が行きたい場所を現地の人に伝える際に、共通言語を欠いた場合を想定して、伝えたい情報を、絵(文字を除く)で表現し伝達する。 ※言語およびジェスチャー等の非言語による表現伝達を禁ずる なお本演習では、「散髪屋・薬局・市場・バス停・エキステンジ(外貨交換)」の5課題を事前に設定し、くじ引き様式で準備した。</p> <p>①班内の4人が、一人ずつ表現伝達者となり、課題を確認してから、黒板にチョークで絵を描く。(2分)</p> <p>②絵を他のメンバーに見せる。(1分)</p> <p>③絵から得た情報をもとに、記録用紙に答を記入する。(1分)</p> <p>④課題の書かれた紙を無言で見せて、答を知らせてから次の課題へ</p> |
| | 20分 | <p>●演習2：ジェスチャーによる情報表現・伝達</p> <p>伝えたい情報を、ジェスチャーだけで表現し伝達する。 ※発信者・受信者ともに無言を心がける ※言語(文字・有声言語・無声の口の動きを含む)や絵による表現伝達、身近にある実物借用や指し示し等を禁ずる なお本演習では、地域の特色から「ふぐ・鍾乳洞・吉田松蔭・湯田温泉」の4課題を事前に設定し、くじ引き様式で準備した。</p> <p>①班内の4人が、一人ずつ演技者となり課題を確認して、ジェスチャーによる表現方法を考える。(30秒)</p> <p>②ジェスチャーを行なう。(10秒)</p> <p>③ジェスチャーから得た情報をもとに、記録用紙に答を記入する。(1分)</p> <p>④課題の書かれた紙を無言で見せて、答を知らせてから次の課題へ</p> |
| Step3 - See | 25分 | 各班でのディスカッションによる演習1・2での情報の表現・伝達活動の評価 |

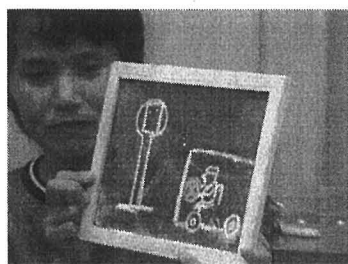


図7 バス停(演習1より)

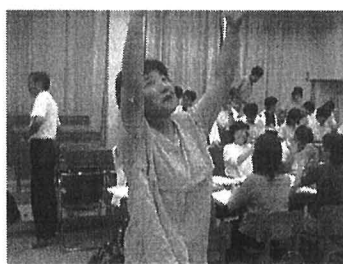


図8 ジェスチャー1

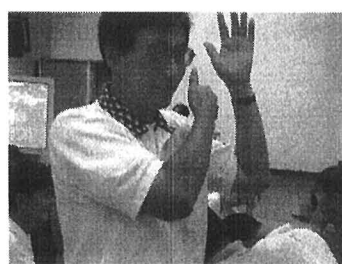


図9 ジェスチャー2

⑥プレゼンテーション技術演習[2]—言語(話しことば)による情報表現・伝達—

班別(3人一組:26)に自学自習形態で演習を実施した。なお、2室3箇所(表6参照)同時進行で実施した。

1) 目的

- ・指示すべき情報を、口頭で的確に表現・伝達する能力を訓練する。
- ・口頭による指示から得られる情報をもとに的確に判断・推察する能力を訓練する。

2) 演習総括: 筆者(林), TA; 筆者(谷口), 他2名

3) 教材・教具: テキスト教材[2], 図形カード(各班2セット, 表7参照)

4) 活動内容: 演習活動の方法・手順を表5に, 活動風景を図10~12に示す。

表5 言語(話しことば)による情報表現・伝達活動の内容

| 項目 | 時間 | 内容 |
|--------------|-----|---|
| Step1 - Plan | 20分 | 各自テキスト教材[2]により演習課題の内容・手順把握 |
| Step2 - Do | 40分 | <p>①班内の2人(発信者と受信者)がペアになり, お互いの状況が見えないように背中合わせに座る。※他の一人は記録およびタイムキーパー</p> <p>↓</p> <p>②【質問できない場合】(20秒) 発信者が机上に, 自由に図形カードを並べる。記録者は発信者の並べ方を記録する。</p> <p>↓</p> <p>③【質問できない場合】(2分) 発信者が自分の図形カードの並べ方を口頭で受信者に伝える。受信者はそのことばに従って机上に図形カードを並べる。記録者は受信者の並べ方を記録する。※発信者と受信者の並べ方の一致をめざす。受信者の聴き返し・質問等を禁ずる</p> <p>↓</p> <p>④【質問できる場合】(20秒) 手順は②と同じ。※②とは異なる並べ方で並べる。</p> <p>↓</p> <p>⑤【質問できる場合】(2分) 手順は③と同じ。※発信・受信者双方からの聴き返し・質問をしても構わない。</p> <p>↓</p> <p>⑥役割分担(発信・受信・記録)を交代して①へ</p> |
| Step3 - See | 30分 | 各班でのディスカッションによる情報の表現・伝達活動の評価 |



図10 図形カード並べ1



図11 図形カード並べ2



図12 図形カード並べ3

表 6 実施場所の内訳

| 場 所 | 班数 |
|------------------|----|
| 本教室(机・椅子は階段状に設置) | 8 |
| 本教室(机・椅子は平面上に設置) | 10 |
| パソコンルーム | 8 |

表 7 図形カードの内訳

| 形 | 長方形 | | | 正方形 | | | | 直角二等辺三角形 | | | |
|---|-----|---|---|-----|---|---|---|----------|---|---|---|
| | 大小 | | | 大 | | 小 | | 大 | | 小 | |
| 色 | 白 | 赤 | 黒 | 白 | 白 | 赤 | 黒 | 白 | 黒 | 白 | 黒 |
| 数 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |

⑦プレゼンテーション技術演習[3]—OHP を利用した情報表現・伝達および評価—

班別(20人—組:1, 19人—組:3)に自学自習形態で演習を実施した。なお, 2室4箇所同時進行で実施した。

1) 目的

- ・OHP の特徴を理解し, それを活かした TP 教材を作成できる。
- ・作成した TP 教材を利用して, OHP の特徴を活かした発表ができる。
- ・評価の観点に従って OHP 利用による発表の評価を行ない, 改善点について知る。

2) 演習総括: 筆者(林), TA; 筆者(谷口), 他2名

3) 教材・教具: テキスト教材[2], TP 各自3枚以内, OHP 各室2台(計4台)

4) 活動内容: 演習活動の方法・手順を表8に, 活動風景を図13~15に示す。

表 8 OHP を利用した情報表現・伝達および評価活動の内容

| 項目 | 時間 | 内容 |
|--------------|-----|---|
| Step1 - Plan | 20分 | 各自テキスト教材[2]により演習課題の内容・手順把握 |
| Step2 - Do | 90分 | ストーリーボードおよびTP教材の作成 テーマ: 「私の住んでいる町や勤務する学校の紹介」 |
| Step3 - See | 90分 | 班別でのマイクロプレゼンテーションの実施とTP教材の評価 |
| | 30分 | 各班の代表者によるマイクロプレゼンテーションの実施と評価 |

5) TP 教材の評価

筆者らが既に関与した TP 教材の評価シート(表9参照)を使用した。

各受講者は, 班別でのマイクロプレゼンテーションにおいて, 各プレゼンターの TP 教材に関して5つの観点から評価するとともに, TP 教材の「良かった点」と「悪かった点」について簡略に記述して, 各プレゼンターに返した。

表 9 TP 教材の評価シート

| TP教材の評価シート | | |
|------------|-----------------------|-----------|
| テーマ: [] | | 発表者氏名 |
| 《評価の観点》 | | (悪い) (良い) |
| A | 文章の記述内容, 量は適切だったか | 1・2・3・4・5 |
| B | レイアウトや配色, デザインは適切だったか | 1・2・3・4・5 |
| C | 文字の大きさや色は見やすかったか | 1・2・3・4・5 |
| D | イラストや図が効果的に用いられたか | 1・2・3・4・5 |
| E | TP の提示方法は効果的だったか | 1・2・3・4・5 |
| 良かった点 | | 改善すべき点 |
| | | |

6) プレゼンターの評価

筆者らが既に開発したプレゼンターの評価シートを使用した。各受講者は、各班の代表者によるマイクロプレゼンテーションにおいて、各プレゼンターに関して7つの観点(表10参照)から、各々10点満点(計70点)で評価するとともに、「工夫がみられた点」と「改善を要する点」について簡略に記述して、各プレゼンターに返した。

表10 プレゼンターの評価の観点

| 観 点 | | 内 容 |
|-----|-----------|---|
| ① | 言語 | 話しことは、聞き手にとって適切であったか ※主語述語、ことばづかい、ことばのクセ等、プレゼンターの話しことばに関するもので、書きとることができるもの |
| ② | 非言語(言語関連) | 声の高さ、速さ、大きさ、間の取り方は適切であったか ※プレゼンターの話しことばに関するもので、書きとることができないもの |
| ③ | 非言語(その他) | 身振り、手振り、顔の表情、体の姿勢、相手との距離、視線の方向(アイコンタクト)、クセ等、主に視覚に訴える非言語は、適切であったか |
| ④ | メディア利用 | 演示用教材の内容、設計、利用方法、量は適切であったか |
| ⑤ | 理解度(知識獲得) | プレゼンテーションは、聞き手にとってわかりやすく有益であったか |
| ⑥ | 関心度(情意関心) | プレゼンテーションは、聞き手にとって印象に残り興味深いものであったか |
| ⑦ | 定着度 | 同じ内容を人に伝達・説明することができるか |



図13 TP教材の作成

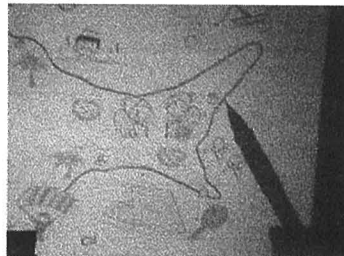


図14 提示された TP 教材



図15 マイクロプレゼンテーション

5. まとめ

本講習における講義は、コンピュータを含めた教育メディアの授業における活用方法、情報教育の意味や現状、その実践方法や方向性を示すことをねらいとした。また演習は、コンピュータの操作技術の習得をめざすものではなく、教師と児童生徒間の教育的コミュニケーションの改善を図るべく、プレゼンテーション技術・能力の育成を目的とした。

情報教育の重要性が指摘されるなかで、情報活用能力の育成をめざすべき教員研修においては、コンピュータ等情報機器の操作技術・能力の習得に偏る傾向がみられ、各教科における利活用についての研修は十分とはいえない。よって筆者らは、本講習において「教育メディア・情報教育=コンピュータ」というステレオタイプの固定観念から脱却するとともに、受講者の「Learning by Doing」を重視して教育的コミュニケーションの改善を図る教員研修プログラムを実践した。本講習の特徴として、以下の4点を挙げることができる。

- (1) メディア利用のプレゼンテーションを多く取り入れた講義形態
- (2) 遠隔教育システムを活用した授業の体験
- (3) 他大学の教官、地域の専門家、TA等の複数の教授者・スタッフで構成された講習
- (4) 受講者の自学自習を主体とした演習の導入

(1) メディア利用のプレゼンテーション

無計画に多彩なメディアを利用することは得策とは言えない。なかでも、DTPS (Desk top Presentation) については、筆者の経験から、聴き手が集中して聴くことができる時間の限度は約 15 分程度である。15 分以上利用する場合は、CUE (知的合図・情的合図) が極めて重要な役割を果たす。各種メディアの教育利用については、各々のメディアの特性を十分考慮した上で、それらを組み合わせた利活用が重要である。

今回、受講者の校種、担当教科、レディネス等などが多様な状況のなかで、様々な角度から幅広い内容を扱う講義を実施した。そこで各種メディアを利用して伝達した情報(知識)が、受講者の興味関心を高めるモチベーションとなり、講義の進め方を見る(体験する)ことを通して、各教科におけるメディアの利活用の具体的なイメージ形成が図れたと考える。

(2) 遠隔教育システムを活用した授業の体験

物的環境の整備が前提となるが、SCS に限らず、テレビ電話会議システムによる遠隔授業を初めて体験した受講者が多かった。教育の情報化をめざした国家プロジェクトとして、インターネット接続やテレビ電話会議システムの導入など、各学校でのインフラ整備が着々と進められている。従前のような Face to Face (対面) による授業形態から情報技術利活用による形態の本格化が予想され、児童生徒と教師間でのコミュニケーション形態の変化への対応が迫られるのは必至である。そこで筆者は、各種メディアや遠隔教育システムを利活用する際の目的意識が重要になると考える。換言すれば、「整備された情報技術をどのように利活用するか」ではなく、「何のために情報技術を利活用するか」を考える必要があり、期待される教育効果や課題意識を前提とした利活用でなければならないことを強調したい。

(3) 複数の教授者・スタッフで構成された講習

本講習に、TA として現職小学校教員による総合的な学習の時間の授業設計に関する実践報告を実施した。さらに、ディスカッションを通じて受講者は、TA が報告した実践をもとに、同じ現職としての立場から、様々な感想を述べ、意見交流を行なった。そこでは、総合的な学習の時間の授業設計において、単独の教師では実施困難と思われる内容でも、学内の複数の教師によるティームティーチングや、地域の専門家や社会人へ教授・支援を依頼することで、実施への可能性が広がることが示唆された。筆者は、ヒューマンネットワークが、情報ネットワークと並んで、多様な立場の人々との連携(コラボレーション)をもたらすと考える。そこで、これからの教師に求められる資質の一つとして、他者とのコミュニケーション能力(連携意識)、およびヒューマンネットワークに代表される人的環境の整備・充実の重要性を鑑み、複数の教授者・スタッフによる構成を試みた。

(4) 受講者の自学自習を主体とした演習の導入

事前研究より、理論の伝達を主にした講義内容・方法よりも、受講者参加型の課題別の演習を重視した方法の有用性は明らかであった。

そこで本演習では、言語・非言語・教育メディア利用の 3 つの観点から、情報の表現・伝達活動として以下の 3 点を、各々 Plan-Do-See のサイクルで構成し実施した。

- ① 言語(話しことばや文字)を除いた絵および身体表現だけで(視覚に訴えて)情報を表現・伝達する活動

- ②相手が見えない状況で話しことばだけで(聴覚に訴えて)情報を表現・伝達する活動
- ③上記の活動を通して獲得したスキーマを再構成・統合し、言語・非言語・メディア(OHP)を駆使して(視覚と聴覚に訴えて)情報を表現・伝達する活動

講習終了後、受講者を対象に実施したアンケート調査から、受講者の9割が本講習に対して高い満足度を示した(70%以上満足:27%, 80~100%満足:62.2%)。

また、マイクロプレゼンテーション演習に対して、「他者から評価されることで、改善点を知った」、「子どもの立場から聴くことができた」などの意見があった。演習全体に対しては、「生の体験ができ、その体験を通して自分自身を振り返ることができた」、「プレゼンテーション能力の不足を実感した」、「言語・非言語・メディアの大切さを改めて痛感した」などの意見が多くあった。これらは、本演習の有用性を示唆するものであると考える。

本受講者の多くは、口頭による意思表示や意見表明などを躊躇する傾向がみられ、その反面、文章等の記述によるものは、質・量ともに充実する傾向がみられた。また、真摯な姿勢で自己評価を行なう傾向がみられた。「演習の時間不足・情報過多や進行が速い」、「安易に妥協せず、納得いくまで考えたり振り返ったりする時間的余裕を求める」、「マイクロプレゼンテーションの評価で指摘された点を改善してもう一度マイクロプレゼンテーションをしたかった」という意見もあった。これらの意見は、本演習の改善点を指摘するものであり、演習内容(量)・設定時間(時間配分・進行速度)・受講者のレディネス等により一層配慮した演習計画の改善が必要である。また、本教員研修プログラムは、特定の物的・人的環境のもとで実施されたものである。今後は、様々な物的・人的環境に応じて実施できる教員研修モデルやそれらを効果的に支援する教材の開発へとつなげたいと考える。

本講習の実施にあたり協力を頂いた筒井眞代先生(京都府宇治市立北小倉小学校教諭)、ならびに真下知子先生(平安女学院大学)に感謝の意を表す。

最後に、本研究成果は、広く関係各位に紹介するために、以下のURLに掲載した。

<http://ica-j.org>

引用文献

- 1) 林 徳治他:「外国人留学生のコミュニケーション能力を高めるマルチメディア教材の開発」,平成9・10年度科学研究費補助金(課題番号09680220・基盤研究(C)(2))研究成果報告書,1999,全73頁
- 2) 林 徳治他:「遠隔講義におけるプレゼンテーション技術の向上を図る教師訓練プログラムの開発・評価」,平成11・12年度文部省科学研究費補助金(課題番号11680220・基盤研究(C)(2))中間報告書,2000,全145頁
- 3) 林徳治:『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術 -相互理解のための自己表現術-』,ぎょうせい,2000,全126頁
- 4) 情報教養研究会編:『情報教育のすすめ』第4版改訂,ぎょうせい,2000,全213頁
- 5) <http://www.meix-net.or.jp/~ogurasho/index.html>